

廣 高 と ヒ ロ シ マ

— 被 爆 50 年 の 回 想 —

廣島高等学校同窓有志の会

ヒロシマと阪神大震災 ——五十年後のわたし——

森 一久

(昭19理甲)

全国の主要都市への無差別爆撃がつづき、膨大な数の犠牲者が出て、いよいよ広島に絨毯爆撃がくるものも時間の問題と思われたあの時。医者^{イサナ}は疎開を許されないとて、跡継ぎの長男(医者)を召集されてからは、たった二人で産婦人科医院を続けている老父母(六十八才、六十二才)のことが心配で、兄茂と相談し、交代で帰広して空襲時に備えようということにしたのが、昭和二十年七月上旬のことであった。そして、まず比較的近い京都にいた自分が帰郷したのが、たしか八月三日であった。

母は、久しぶりに帰ってきた私に少しでも栄養を、と思ったのか、或いはその場所をしかと私に覚えさせたいと考えたのか、その翌日、奥海田の母の里の桑原家へ連れていってくれた。持っていた着物などを近所の農家で米や野菜に交換してもらい、自家製の野菜まで頂戴して同家を辞したのは、すでに日暮れ刻だった。桑原家では、夫を戦争で失われたユキミさんが、義父と二人の幼児に、田畑の世話まで、一手に切り回しておられた。この方が僅か二日後に、私の命の恩人のその第1号となろうとは、神ならぬ身の知るところではなかった。そして、重そうなりユックに風呂敷包みを持った、あの時の小柄な母の姿は、今

日でも私の脳裏を離れない。

最後の茶会

八月五日の晩は深夜に空襲警報があり、医者（は）の父は近くの幟町小学校に詰め、警報が解除になって帰宅したのは午前二時頃だったろうか。真夜中に三人で、僅かの配給の砂糖を菓子代わりに喫した、両親の好きな抹茶のひととき、これが永久のわかれの儀式となってしまった。

その翌日の朝（は）よく眠っていた私は、突然大地が揺れ、かすかに青空を見たような気がして目が覚めた。八畳間に母の空の寝間を挟んで二メートル先に寝ていた父のうめき声を聞いたような気がしたが、家屋の瓦礫に完全に埋まって息はできるが身動きもできない。てっきり直撃弾だと思い、助けを呼ぶも、外はシーンと静まり返って何も聞こえない。暫くして、上のほうでバタバタと一方向に逃げるような多数の足音。：もう駄目と観念したとき「死ぬときは一人」とか、死ぬとはこういうことか、と思つたとき、一種の諦めの感情とともに、身体が浮き上がったような、しかしやや冷静な気分になった。そして、夢多き青春も、無為のままここに一生を終えようとする一人の若者の姿を、別の自分が憐れんで一筋の涙が流れた。（「無為」の中身は多様で大量だったが、恥ずかしいものもあり紙面の都合とい（う）ことにして、割愛）そんな状況が（あとで考えると）一時間も続いたろうか、ハッと我にかへつた。にわかに「父は、母は」と気が疼き、生きろ、生きようという気持ち（と）が湧き上がってきた。駄目でもともと、渾身の力をふり絞つてあがく。少し隙間ができたような気がして、夢中で立ち上がる。いろんな物にひつかかるが、どこが傷つこうが頭さえ出れば、と這い上がる。（あとで見ると背中の肉が2センチ角ほど無くなっていたが。）

道路に飛び降りると、アスファルトは熱く柔らかく、足がめり込む。見渡すと、広島街は文字どおり喪失して、まさに世紀末の風景のなか、わずかに中国新聞のビルがまどから火を吹いている以外、人影もまばら。その大部分が、剥けた皮膚をぶら下げて東へ走る姿は、異様の極み。瓦礫の上にとつてかえし、隙間に口をつけて、何度も父を呼んでは耳をつけるが、応答なし。：背中が熱いのに気づき、振り返ると熱風のその温度が急上昇しているらしい。もはやこれまで、と心のなかで父に手を合わせ、稻荷街^町の鉄橋の袂まで逃げる。そこには、大勢の火傷や怪我で放心状態の人々、既に息絶えている人、息絶え絶えに「水をくれ」と呻いている人、「水はやるな。やったら死ぬぞ」と叫ぶ声。暗黒の地獄図のなか、顔みしりは見当らない。ふと視線を感じると、建物疎開で取り壊しになった山口街^町電停前の病院の代わりに父が近くに借りていた仮設医院にいた、看護婦のYさんの無事な姿を見つけた。一緒に居たはずの兄嫁（泰子）のことを尋ねたりしながら、回りをみまわすと、ズタズタの血染めのゆかたにパンツという私の格好など、最もまともな姿、この物凄い光景にあらためて、呆然と目をはしらせるのみ。やがて「火が来たぞ」の声、慌てて川に飛び込む。凄惨な熱風にそばの鉄橋が焼け落ちていく。そのたびに川に潜ってやり過ごす。全て焼き尽くされたかと思うころ、一天俄にかき曇りバケツをひっくり返したような豪雨。私は無意識に川に潜って雨を避けたが、真夏の汗を雨に流していた人もいた。もしこれが「黒い雨」だったとしたら、このことは、私を救った数えきれないほどの多くの「偶然」の一つとなったのかもしれない。

あたりに暮色がせまり、三々五々といずこへか立ち去る姿が目立ってきた。二日前に行つて道順はよく覚えていたが、無論鉄道は不通で、奥海田の桑原家にたどり着いたころには日はとつぷりと暮れて居た。

同家には、親戚縁者二十人近くが避難してきたが、私たちは一カ月ちかく、ここで衣食住、全ての面倒を見ていただいた、前途のユキミさんのご苦勞は、本当に筆舌に尽くしがたいものだつたに違いない。小生はここを足場に、早速翌日から毎日、むすび弁当を作つて貰つては、肉親の消息をもとめて、広島市内へ徒歩で往復することとなつた。

三人はいずに

端折つたつもりが、大分紙数を費やしてしまつた。…あとはごくあらましを。

父の遺骨が仰臥したままの、整然とした姿を保つてくれたこと、これが、私の心にとつて僅かの救いとはなっている。長兄恒良は軍医召集されたばかりで、爆心真近かの西練兵場にて朝礼中に被爆。広島駅ちかくの瓦礫に書かれた夥しい伝言のなかから、「森の若先生は太田にいる」を偶然にも発見。東京からかけつけた兄茂と、附中の特別クラスで東城町にいた甥弘とともに島根県同町に駆けつけたが、本人とやつと判る形相ながら意識はつきりして、「病院の再建はどうしようか」と呟く。学校の講堂に収容されていたのは二百名ほど、毎日数人の方が息を引き取るなか、十日間付き添つたが、神経を完全にやられてゐる為か、痛がらぬのが一層痛々しい。介抱といつても赤チンを塗るのと、痒がる耳の中からピンセットで蛆虫を取るだけ。八月二十三日に息を引き取り（享年四十八才）、校庭で深夜茶毘にふし、広島^寺の菩提樹、本山国前寺に持ちかえる。

母カヨは六日早朝、私らがめざめるまでには戻る、と言つて（爆心近くの）大手町の知人宅に出掛けていた。その消息をもとめて、翌日から三日にわたり歩き回るも、凄惨な無数の遺骨のなかに、つい見いだ

骸

すことは到底できなかった。姪の泰子も、ともに消息不明に終わる。康子（みちこ）は広島女高師付属山中高女の一年生、建物疎開の作業に早朝から動員され、大手町方面にいたはず。（同じクラスで只一人の方が福山に在住と兄弘がやと一昨年知ったが……）結局、小生だけが生き残され、亡くなった五人のうち、女性三人も前記国前寺の森家合塔に葬つてあるが、やはりあの平和公園の一隅にある「原爆供養塔」の中に必ずいると、帰広のときは「すまない」と合掌する私である。

奇跡の蘇生

一区切り付いた八月末日、兵庫県西宮市の次兄山香三郎宅に身を寄せる。気が立っていたせいか、数日はとくに疲労や異常を感じなかったが、新聞にはぼつぼつ「原爆症」のことがでていたし、なんだか風邪っぽい気分がしたので、かるい気持ちで大阪大学の小沢内科を訪れた。「本当に何ともないんですか。白血球が七百しかないが」といわれ、それが正常値の1/10と知って愕然。そうこうするうちに、原因不明の高熱で山香宅に寝込んでしまった。次兄三郎は十六才年上、末子で偏食で病気がちだった私の面倒をよくみてくれたひとだったが、それからは義姉民子にも、全面的に面倒を掛けてしまう。熱は朝は三十七・八度、夕方は三十九・四十度という状況が続く。兄茂もしばし休学（東大物理）して看護にあたってくれたが、どんな薬も輸血も全く効なく、近所の医院も持て余す状況。十月下旬には、終日四十一度の熱が十日も続き、意識も朦朧としてきて、いよいよ最期かと覚悟をきめた。それまでも格別世話になっていた親戚の三木孝造氏（武田薬品常務、後に副社長）は社医の高村氏に最後の処方依頼された。その結果、それまでの薬や輸血などを一切取り止め、同社十三工場で特製したリンゲル液（生理的食塩水に各種ビタミン

類の栄養素を加えたとか。今日の点滴液のようなものを筋肉注射用に五十年前に！）毎日五〇〇CCずつ腿に注射する、背中のツボ十数カ所にビタミンB₁の濃厚液を打つ、こととされた。

不思議なことに忘れもしない十一月三日朝、目覚めたとき、熱は急転直下三十六度に下がっていた。しかし三カ月の熱病との闘いで文字通り骨と皮、脚の脛などは象皮（色で）のすりこぎ棒位の太さもない、しばらくは座りも立つてもできず、二カ月後の正月元旦に始めて、這って隣の部屋にいつて、雑煮と一緒に食べることができた。半年近くも座敷に寝かせてもらったが、朝方は陽のさしこむ縁側の方に布団を引つ張つてもらい、午後は奥に戻してもらうを繰り返したため、私の身体の下にあった二枚の畳の床は、芯まで完全に腐ってしまった。それから十九才の若者の回復期の食欲はすさまじいもので、二人の幼子をかかえた義姉民子にかけた負担を思うと胸がつまる。

それでも血液所見の回復など遅々としてすすまず、昭和二十一年五月になつてはじめて、広島に戻れた。（このあいだ京大にも連絡せず、森は死んだのか、と同輩や湯川先生にも心配をかけてしまった。）十カ月も留守した広島では、見知らぬ外人が我が家の土地に建築を始めているのを発見し、険悪なやり合いの末立退かせたり、疎開してあつた荷物を一部受取つて、タケノコ生活の準備をする、など兄茂等と将来を相談しあつた。その後、私は卒業までの二年あまり、京都の下宿より西宮の兄の家に居るほうが多いという生活を続けたし、甥の弘も中学の後半から高校卒業まで通わせてもらった。この間、兄三郎・民子夫妻にかけた経済的・精神的・生活上の好意と負担は、世の親のそれをはるかに越えるものとして、決して忘れることができない。

五十年の歳月がながれ、昨一九九四年五月一族相集って、原爆死の五人の五十周忌法要を国前寺にて相営んだ。思えば、この五十年間の間、森一族は八十五才の兄三郎をはじめ皆元気にすごし、一つの葬式も出さなideきた。逝った人の加護にちがいないだろうが、それにしても、小生は何故こうしているのだろうか。「こうしている」は数々あるが、主体的には求めもしないのに、「ミイラとりがミイラ」のようなことが続いたあげく、原子力平和利用の真つ只中にいる。昨年は平和利用の大会を、はじめて広島国際会議場で開き、関係者にヒロシマの「心」をぶち込もうなどとしている。

阪神大震災でまた

さて、五十周忌をおわったところから、私は兄三郎夫妻のことが、妙に気掛かりになってきた。兄らの歳を考え、自分だって元気とはいっても成人病でひっくり返ったりしている。おれと弟兄の近くに住んで、何とか行き来できるようにしたい、という気持ちにかられてきた。それに、仕事の転機やケジメも「今度」自分でつくるしかない」と思いはじめた矢先、思い切って毎日の出勤が時間的に不可能な場所に住居も移すのも一案と頭に浮かんでいた。たまたま次男が住んでいた家（大阪府の東北、京都にちかい高槻市）が転勤で空いていたのを、最低限の家財を持ち込み、携帯電話とファックスをたずさえ、週末は必ずそちらに滞在し、毎週月か火曜に上京することにした。ジパング割引とはいっても、けっこうな出費ではあるが、兄一家とはたのしく行き来でき、やはり関西の水が合うのかこんなハードな生活にも慣れてきた。そして、一月十六日夜は西宮の兄宅にいて、あの週だけは後半上京の予定にしていたので、「泊まっていけば」と勧められたが、妻禮子の上京予定もあって、高槻にもどってきて、おそく就寝した。

一月十七日早曉、突き上げるような初体験のすごい揺れ、ヒロシマのときと同じく無意識にフトンを被るも、家が持つかと思うほどの強い揺れがつづく。三十分ほどして電気は復旧したが、淡路島が震源くらいで、情報が混乱していて被害状況も良く判らない。戦中派の悲しさというのか、考える前に身体が動いてしまい、妻がむすびとお茶を準備したときには、西宮へ行くつもりで、家を出る。こういうとき「どうやっていくの」等と聞かないのが妻の長所か、と下らぬことをおもいながら、JR高槻駅へバスで。鉄道は全部不通、タクシーはいくら頼んでもあちら方面に行ってくれるわけもない。諦めて家へ帰るべく乗ったバス。いままでなかったことだが、無意識に運転手の隣の最前列の席に座り、完全渋滞の神戸方面への車の群れに目を落としたとき、なんと「兵庫」ナンバーのタクシーがいるではないか。無理にたのんで飛び下りて、口説く。「判った、行きましよう」「行くだけじゃあかん。なんぼ遅うなつても、戻らにゃ。」「…自分（タクシーの運転手）の家は垂水区やで、死んではいまいよ。よし、兄さんの方を助けにいきまひよう」となつて、それから延々十時間半（三十キロ、つまり歩く速さ）かけて、西宮北口に着いたのは九時半。戦時中の空襲跡を思わせるガス臭い無人の暗黒の廢墟。兄一家の無事（家店は全壊ながら、兄が眉間を四針縫っただけで）は、収容先の小学校講堂で知る。

そしていま、兄三郎・民子夫妻は、奈良の娘の嫁ぎ先、吉岡睦さん宅にあたたかく寄寓させてもらい、残った家財を預かっている高槻の拙宅とのあいだを行き来しながら、高齢で遭遇した環境の激変をのりこえ、健気に社会復帰の方途を模索している。

それにしても、私は、「兄夫婦のそばに早く行かねば」とわたしをあんなに駆り立てたものは、一体な

（一月十七日）

んだっただろうか、ヒロシマの場合と対比し、この震災が私の誕生日だったことに思い当りながら、己が運命の数奇さに呆れはてている。そして、「二度あることは三度ある」という諺もあるからには、もつと生きておれ、ということかと悟ったような気持ちになつたりしている。

（日本原子力産業会議専務理事）